The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	2024 年度（春夏学期） 日本語5 実践報告
Author(s)	六城, 雅章
Citation	日本語講座年報. 2025, 2023-2024, p. 49-51
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102679
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

2024 年度（春夏学期）　日本語 5 実践報告

六城 雅章

1. はじめに

本稿は、2024 年度（春夏学期）の「日本語 5」の実践報告である。この授業の受講者は 12 名であり、出身地別にみると、中国 6 名・韓国 3 名・台湾 1 名・ミャンマー1 名・トルコ 1 名である。

2.　授業の概要

2.1　授業の目的・学習目標・成績評価

この授業の目的は、「日本語のより高度な理解・運用のために、日本語の感動詞の使い分けや発音などを修得する」ことである。

また、この授業の学習目標は、次の 2 つである。

（1）感動詞を、適切に使い分け、発音することができる。

（2）実際の使用例から、その感動詞の意味や使用者などを説明できる。

そして、この授業の成績は、学習目標の（1）を毎回の授業で求める実演への取り組み方（30%）によって評価し、（2）を期末レポート（70%）によって評価した。なお、期末レポートの内容は、授業で扱った感動詞の中から 1 語を選び、その実例を収集して分析せよというものであった。

2.2　教科書・参考図書など

教科書は指定せず、自作のプリントを配付した。このプリントは、日本語の感動詞の使い分け・発音・意味・使用者などの網羅的・体系的な理解を目指して、筆者のこれまでの研究成果――稿末の六城（2015-2022）――の内容を再整理しつつ、実例や発音の詳細などの情報を追加したものである。

参考図書については、『現代感動詞用法辞典』を指定した。これは、現代日本語の感動詞に特化して編集された辞典であり、その使用者や発音などの情報を詳細に記述したものである。

その他、感動詞周辺の語類、およびこれをめぐる文化的背景などを紹介する目的で、さまざまな書籍を教室に持参し、受講者に回覧させた。一例を挙げると、『日本俗語大辞典』『罵詈雑言辞典』『県別 罵詈雑言辞典』『伝承遊び考 4 じゃんけん遊び考』『大人と子どものあそびの教科書 世界のじゃんけん』などである。

3. 各回の授業内容

各回の授業内容は、表 1 のとおりである。

表 1　各回の授業内容

回	授業内容
1	・日程・内容・成績評価の説明 ・受講者自己紹介
2	・前回の振り返り ・「感動詞」概説
3	・前回の振り返り ・「呼掛」を表す感動詞の概説と実演（1）
4	・前回の振り返り ・「呼掛」を表す感動詞の概説と実演（2）
5	・前回の振り返り ・「ほめあげ・あざけり」を表す感動詞の概説と実演
6	・前回の振り返り ・「行動制御」を表す感動詞の概説と実演
7	・前回の振り返り ・「応答」を表す感動詞の概説と実演（1）
8	・前回の振り返り ・「応答」を表す感動詞の概説と実演（2）
9	・前回の振り返り ・「応答」を表す感動詞の概説と実演（3）
10	・前回の振り返り ・「掛声」を表す感動詞の概説と実演（1）
11	・前回の振り返り ・「掛声」を表す感動詞の概説と実演（2）
12	・前回の振り返り ・「感動」を表す感動詞の概説と実演（1）
13	・前回の振り返り ・「感動」を表す感動詞の概説と実演（2）
14	・前回の振り返り ・「感動」を表す感動詞の概説と実演（3）
15	・前回の振り返り ・授業全体の総括

3.1　第1回の授業内容

第1回の授業では、オリエンテーションおよび自己紹介を行なった。また、次の2点を目的として、簡単なテスト（と、その解説）を実施した。

（1）筆者が、現時点での受講者全員の理解度・到達度を把握するため。

（2）各受講者が、現時点での自身の理解度・到達度を把握するため。

なお、このテストの結果は、この授業の成績評価には一切かかわらない。また、このテストは、そのことを受講者に説明したうえで実施した。

テストの内容は、10分間で次のような選択式の問題を13問解く、というものである（ちなみに、この設問の解答は④であり、各選択肢を選んだ人数は、①が1名、②が2名、③が2名、④が7名であった）。

> 空欄に入る語として最も適切なものを①～④の中から選び、記号で答えなさい。
> （女子高校生が、テストで満点を取った友達を褒める場面）＿＿＿＿＿、天才高校生。
> ①さあ　②はい　③やっ　④よっ

テストの結果は次のとおりであり、受講者間の理解度・到達度の差が確認される形となった。

- 13問正解……3名
- 12問正解……3名
- 11問正解……3名
- 10問正解……1名
- 9問正解……2名

また、この結果を受けて、筆者は、次の2点を意識した授業運営を心掛けた。1点目は、自明とも思われる基本的なことがらについても可能なかぎり省略せずに説明する、というものである。これは、理解度・到達度が（受講者全体の中で）低い者を意識したものである。2点目は、時間に余裕があるときには周辺的なことがらを積極的に扱う、というものである。これは、理解度・到達度が（受講者全体の中で）高い者を意識したものである。

3.2　第2回の授業内容

第2回の授業は、次のような構成で行なった。

- 【前回の振り返り】（約20分）
  前回提出分のコメントシートに記載された質問などに対して、筆者の見解を示した。その際、受講者に発言を求めたり受講者間での議論を促したりした。
- 【「感動詞」概説】（約70分）
  第3回以降の授業内容を理解するための準備として、「感動詞」の概説を行なった。

【前回の振り返り】については第3～14回の授業内容とともに3.3節で述べることとし、ここでは、【「感動詞」概説】について（一言であるが）述べる。

第2回の授業では、【「感動詞」概説】として、『言語学大辞典 第6巻 術語編』の「間投詞」の項の記述を引用しつつ、次の8点について説明した。

（1）国文法における位置づけ
（2）人間の「行為」との関連性
（3）語形の特徴
（4）表記の特徴
（5）文の構造
（6）現場依存性と多義性
（7）属性や待遇関係との関連性
（8）表現効果

3.3　第3～14回の授業内容

第3～14回の授業は、次のような構成で行なった。

- 【前回の振り返り】（約20分）
  前回提出分のコメントシートに記載された質問などに対して、筆者の見解を示した。その際、受講者に発言を求めたり受講者間での議論を促したりした。
- 【概説と実演】（約70分）
  感動詞の使い分け・発音・意味・使用者などについて概説した（各回の内容は表1を参照）。その際、その回で扱った感動詞を、一つ一つ受講者に発音させた。また、適宜、受講者に発言を求めたり議論を促したりした。

【前回の振り返り】に比較的多くの時間を割いたのは、「理解できなかったことがあっても、くりかえし説明を受けることができる」「授業で扱っていないことがらについて疑問を抱いた場合、それを解消することができる」ということを受講者に理解してもらい、授業への積極的な参加を促すためである。

そして、この構成で授業を運営した結果、この授業に新たな側面が加わることとなった。受講者が積極的に授業に参加するようになったため、回が進むにつれて、受講者の自発的な発言や議論が増加していった。また、それに伴い、「自分の母語にも同様の

感動詞が存在する」「自分の母語にも似た言い方があるが、細部が異なっている」といった情報が多く集まるようになった。すなわち、「日本語の学習」のみを目的としていたこの授業に、「日本語と他言語との対照」の側面が加わることとなったのである。

3.4　第 15 回の授業内容

第 15 回の授業では、第 2～14 回と同様の「前回の振り返り」を実施したのち、授業全体の総括を行なった。また、時間に余裕があったため、舌打ち行為や挨拶表現などについても扱った。

4. 受講者の反応

この授業に対する受講者の反応は、筆者の想像よりも良かった。参考までに、コメントシートの記述の一部を匿名で抜粋し、次に示しておく。

- 最初のテストがとてもおもしろかったと思います！
- 15 回の授業を通して、様々な感動詞について学べて興味深かったです。
- なんとなく聞いたことがあったり、知っていた感動詞について、使い方や具体的な意味などを知ることができ、よかった。
- 感動詞について専門的なことを学べたのはよかったです。これから身の周りの感動詞にもっと気をつけられると思います。
- 授業のテーマ以外にも、自分の興味分野や他の国の言語などにも触れることができて、色々と楽しく勉強できる時間でした。

5. 今後の課題

以上、2024 年度（春夏学期）の「日本語 5」について述べた。最後に、15 回の授業を終えて明らかになった課題について述べておきたい。

今後の課題として挙げられるのは、受講者間における発言回数の差の改善である。先に触れたように、この授業においては、受講者による発言が次第に増加していった。これ自体は喜ばしいことである。だがその一方で、全回を通してみた場合に、各受講者の発言回数に明らかな差がみられたことも事実である。もちろん、これにはさまざまな原因が考えられる――たとえば、各受講者の性格（人前で発言することに対する心理的な抵抗の有無や程度差）・各受講者の興味（授業内容に対する興味の有無や程度差）など――。また、強引に回数を揃えればよいというものでもないであろう。とはいえ、発言回数の差を小さくすること自体は可能であったように思われる。今後は、より教室全体を意識した授業運営を心掛け、改善に努めたい。

【参考文献】

浅田秀子（2017）『現代感動詞用法辞典』東京堂出版

奥山益朗［編］（1996）『罵詈雑言辞典』東京堂出版

加古里子（2008）『伝承遊び考 4 じゃんけん遊び考』小峰書店

亀井孝・河野六郎・千野栄一［編著］（1996）「間投詞」（『言語学大辞典 第 6 巻 術語編』三省堂、pp. 249-252）

真田信治・友定賢治［編］（2011）『県別 罵詈雑言辞典』東京堂出版

田中ひろし［著］・こどもくらぶ［編］（2002）『大人と子どものあそびの教科書 世界のじゃんけん』今人舎

米川明彦［編］（2003）『日本俗語大辞典』東京堂出版

六城雅章（2015）「名詞による呼掛について――喚体論の視点から――」『日本文藝研究』67-1、関西学院大学日本文学会、pp. 59-78

六城雅章（2016）「呼掛詞による呼掛について」『日本文藝研究』67-2／68-1、関西学院大学日本文学会、pp. 71-86

六城雅章（2017）「掛声について」『日本文藝研究』69-1、関西学院大学日本文学会、pp. 103-123

六城雅章（2018）「応答詞による応答について――呼掛に対する応答の場合――」『日本文藝研究』70-1、関西学院大学日本文学会、pp. 49-72

六城雅章（2020）「感動詞「おら」の機能について」『日本文藝研究』71-2、関西学院大学日本文学会、pp. 127-148

六城雅章（2021ａ）「感動詞による感動について」『日本文藝研究』72-2、関西学院大学日本文学会、pp. 199-220

六城雅章（2021ｂ）「疑問文に対する応答について――応答詞による応答の論――」『日本文藝研究』73-1、関西学院大学日本文学会、pp. 131-153

六城雅章（2022）「呼掛文・挨拶文・ほめあげ文・嘲り文について」『日本文藝研究』74-1、関西学院大学日本文学会、pp. 61-84